

## 韓国の子どもとセラプレイの現状 —— ソウルにおける心理療法の現場から ——

星野真由美<sup>1)</sup>・高井美和<sup>2)</sup>・久保千晶<sup>3)</sup>

### Cultural Adaptation of Theraplay Practices : Seoul, South Korea : Description of the field work of Psychotherapy in Seoul

Mayumi Hoshino, Miwa Takai and Chiaki Kubo

#### Abstract

The importance of attachment and relationships is recognized in various fields in Japan today. Some mental health treatments or programs have been used to improve attachment and the quality of the parent-child relationship as an early intervention for infants; however, they have not yet been widely accepted in Japan. This article first provides a summary of the basic structure of Theraplay, a mental health treatment and educational method focusing on relationships. Next, the article discusses the use of Theraplay in South Korea which has been practiced there for over a decade. During this time Theraplay Korea has undergone numerous studies and its practice have been adjusted so that Theraplay practices fits the culture of South Korea. The authors of this article utilized the results of the field work in South Korea to concretely describe the use of Theraplay in that country including main locations for treatment, practice at welfare and educational facilities, as well as, therapist education in the universities. Based on the discussion of the practices of Theraplay in South Korean, we will examine how Theraplay might be adjusted for the needs of parent-child relationships in Japan is examined.

keywords : Theraplay, attachment, PlayTherapy, parent-child psychotherapy, Japan

キーワード : セラプレイ, 愛着, プレイセラピー, 親一子心理療法, 日本

#### はじめに

近年の子どもを対象とした心理療法において注目されている視点がある。それは、治療過程における支援者として親（本稿では子どもの主要な養育者の意で用いる）を位置づけ、その協力を得な

がらセラピーを行おうとする視点である。このような視点を具体化した心理療法のひとつにセラプレイ (Theraplay<sup>®</sup>)<sup>1)</sup> がある。セラプレイは、主に、関係性、愛着関係、自己制御などの問題を抱える子どもに介入するため、親子の心と身体の間を重視し、子どもの心理的ニーズに適した

1) 育英短期大学保育学科

2) セラプレイカウンセリングセンター東京

3) さくら心理相談室

遊びを用いる心理療法・教育方法であり、欧米やアジア諸国においても治療が行われてきている。本稿では、まず、米国におけるセラプレイの開発とセラプレイの基本概念を明らかにしたい。次に、米国で開発されたセラプレイを自国の文化に適応させるため研究と実践を重ねてきた韓国におけるセラプレイの概況について論じたい。韓国のセラプレイの概況を論じるに際しては、とくに著者らが、2012年7月29日から8月1日にかけて実施したソウルにおける現地調査<sup>2)</sup>の成果を活かして、セラプレイの主要な治療拠点や、福祉・教育機関における実践の状況、大学におけるセラピスト養成など、韓国におけるセラプレイの具体的な展開についても明らかにすることを試みたい。

## I. セラプレイの基本概念

セラプレイは、1965年米国連邦政府の責任により行われたヘッドスタート・プログラムの一環として、臨床心理学者のジェーンバーク (Jernberg, A.M.) により開発された。ヘッドスタート・プログラムは、米国政府による教育事業で低所得者層の家庭の幼い子どもに対するプログラムとして計画され、多様なニーズに対応した就学前教育の供給に焦点を当てたものである。以来、セラプレイは早期の治療介入や問題行動予防プログラムとして、デイケア (託児所) や幼稚園、特別支援学級や普通学級、短期入所施設や地域の精神保健分野、精神保健の個人開業の中で実践されている。

セラプレイは一般的に18ヶ月～12歳の子どもとその親を対象とすることが多いが、現在その対象年齢や治療適応は多岐にわたっている。セラプレイが、個人のクライアントに奏功したという実証研究はかなりの数に上る (Booth; Jernberg, 2010)。モーガン (Morgan, 1989) の実践的調査研究では、抑うつ、社会適応の難しい子ども、発達障がい (ADHD・ADD・LD・PDD) の子どもに、自信、自己コントロール、信頼感、自尊心の発達

においてポジティブな効果が認められた。リッターフェルド (Ritterfeld, 1990) によると、セラプレイを受けた言語障がいのある子ども達は、他のセラピーを受けた子ども達と比べ、言語表現の取得だけでなく社会的能力にも効果があったという結果が示されている。また、リンダマン (Lindaman, 1996) は、セラプレイの実施により施設から養子縁組された子どもたちの問題行動の改善が見られ、養父母との関係の形成に有効であったと述べている。セラプレイは現在およそ36カ国に広まっており、世界各国で臨床及び研究が実施されている (Munns, 2009. Siu, 2009. Salo; Lampi; Lindaman, 2010. Wettig; Coleman; Geider, 2011.)。

セラプレイは、構造化されたプレイセラピーのひとつであり、セラプレイ国際本部 (TTI) 認定セラプレイセラピストが行うものである。それは、対話によるセラピーではなく解釈も与えない。セッションの中では、遊びを通じて「今、ここで」起こっている現象の中、子どもの言動に対して同調しながら治療過程が進行される。子どもの感情をリフレクトすることはしばしば行われるが、それよりもプレイフルなやりとり (遊び) が重視される (Munns, 2000)。セラプレイで行われる活動 (遊び) とは、乳児と親との間で起こる健全な相互作用のパターンの中から抽出された4つの次元 (「構造 Structure」, 「関わり Engagement」, 「養育 Nurture」, 「チャレンジ Challenge」) を基本概念としている。セラプレイのセッションの原則は、対象の子どものニーズや発達に合わせた4つの次元が遊びの中に組み込まれており、かつ楽しいことである。BoothとJernberg (2010) によれば、「構造」の活動は、予測可能で安全な、揺るぎない枠組みを大人が子どもに提供することにより、子ども自身が自分の情動を調整することを助ける。「関わり」は、情動調律 (affective attunement) によって、お互いに親密につながっているという気持ちを生み出し (Stern, 1995)、楽しい遊びが適

切な刺激（覚醒）水準で行われることにより、人とやり取りする事が心地よい事を経験する。「養育」は、安全で安心できる環境の中で、子どもが愛される価値のある存在であることを感じられるよう、大人が子どもの内的要求に温かく応えていく。「チャレンジ」は、子どもが安全基地 (secure base) (Bowlby, 1988) の中で、達成感を感じることでできる範囲の挑戦を与え、楽しむことができるように激励する。子どもは、その事で自分自身の価値を感じられるようになる。これらの基本概念に基づいたセラプレイの多様な活動は、愛着対象の不在や、喪失経験により形成された関係性のパターンを、今の親子に適したものとして新たに安定したものに再形成する事を助ける。

セラプレイのセッションは、どこの家にもあるようなものを使用し、関わりを重視した遊びを行う。活動内容は、時間的、空間的枠組みの中で、「ローション遊び」「コットンボール吹き」「新聞紙パンチ」、時にはシャボン玉や風船を使っての対戦遊びや、協力をし合う遊びなどが計画される。基本的に一週間に一度親子で、およそ30分～40分の遊びをセラピストと体験する。セッションの様子はビデオに撮影され、後にセラピストと親が話し合いの時間を設け、映像を見ながら子どもの理解を共に深める。

こうした治療構造の特徴には、セラプレイの目標や方法論が反映されている。セラプレイの治療目標は子どもの変化だけでなく親子の関係性の変化に置かれていることから、セラピストと子どもだけがセラピーを体験するのではなく、セラピストと子どもが遊んでいる様子を親が観察することや、セラプレイルーム内でセラピストのリードのもとに親子で遊ぶこと、最終的には遊びを通して改善された安定した関係性を日常生活に般化させていくことが目指されている。そのために、遊びを観察する部屋が準備され、録画した遊びの様子を親にフィードバックすることが必ずセラプレイの治療過程で行われている。

セラプレイはさまざまな場面で活用されているが、特徴的なものとして里親教育での実施がある。里親のもとに来る子どもたちはさまざまな生育史を有しており、「健全な」親の養育を必要としている場合が多い。そこで里親との愛着の再構築を支援するため、里親向けの研修と、親子でのセラプレイが実施されてきている。シカゴでは養子縁組の検討のためにセラプレイが導入されており (Jernberg, 1979)、フィンランドでは代替養育機関 (IV章で後述) にセラプレイのセラピストが雇用され、里親教育の指導及び家族の支援<sup>3)</sup>を行っている。

また、セラプレイは個別を対象とするだけでなく集団の心理療法・教育方法としても様々な場面で活用されている。その中でも、保育園・幼稚園・学校の子どもたちに実施する集団セラプレイ・プログラム (サンシャインサークル、レインボー) は、心理療法士だけでなく教育・保育関係者が実施している機関もある。セラプレイの姿勢や精神は集団セラプレイ実施者に享受され、子どもへの治療的介入、問題行動予防プログラム、子育て支援プログラムとしても実践されている。

## II. 韓国におけるセラプレイ導入の背景

韓国におけるセラプレイ導入の背景について管見する範囲でもっとも簡潔に整理をしているのがキム (Kim, 2012) である。キムは、親子の愛着関係と「母性剥奪 (maternal deprivation)」 (Bowlby, J.) を鍵概念としてその背景を3つの時期に区分して論じている。キムによれば、韓国では元来、儒教の理念に基づき母子の愛着は子育てをする上で自然なことであり、ほとんどの母親は子どもたちと身体的にも精神的にも親密に繋がっており、その愛着関係は安定していて健康的であった。しかし、1950年代以降、韓国の子どもたちは3つの時期の「母性剥奪」を経験することとなった。「母性剥奪 第1期」は、朝鮮戦争 (1950年～1953年)

の影響による時期である。戦争による被害により多くの子どもが孤児となり、親子関係に深刻な問題が生じた。また、戦争による飢餓や極度の貧困は、母子の愛着関係に著しい損傷を与え、1950年前後に生まれた多くの子どもたちはおよそ戦後10年間、母性を剥奪された状態であった。

そして、1970年代～1980年代にかけて、再び母性の喪失を経験することとなる（「母性剥奪 第2期」）。これには、経済成長、女性の社会参加、女性の権利の向上などの価値体系の変化が関与しているという。韓国の出生率は経済発展と同時に1980年代に急落することとなるが、戦争や貧困と違い、人々は2つの重要な新しい価値観（経済の発展・女性の社会参加が達成されること）が、母性喪失の起因となっていることに気付かなかった。

21世紀に入っても深刻な少子化の傾向は続き、韓国政府は、少子化の原因は子どもを育てる困難さ（「育てられないから産まない」）にあるとみて支援を始めた。具体的には、保育施設の増設、保育費の全額負担などが挙げられる。こうした取り組みによって、共働きをしていない親までも無料保育が可能になり、子どもを保育園に預ける親が急増することが懸念されている。こうして、「母性剥奪 第3期」に今韓国社会は直面しており、親も、専門家も、そして政府も、子育てにまつわるこれまでとは違った「母性剥奪」という重要な問題に向き合う必要に迫られている。韓国の子どもたちにとって「安心できる愛着関係」をどうしたら守っていけるのかが、セラプレイの専門家にも投げかけられているとキムは論じている。

### III. セラプレイ カウンセリングセンター

韓国におけるセラプレイの導入と普及を牽引してきた機関のひとつに「ユン セラプレイ カウンセリングセンター」がある<sup>4)</sup>。

同センター長のユン (Youn, M.) も、キムと同じように愛着関係と「母性剥奪」を鍵概念に韓国のセラプレイのが急速に広がった背景と理由について次のように述べている。

近年急速な経済成長に伴い、韓国でも女性が社会進出するようになり、さらに子育てに関する新たな制度の成立や、教育・福祉サービスについての新たな措置によって、母親たちは容易に子どもを保育施設に預けることができるようになってきた。無償で子どもを預けられる制度もできたのだが、その制度は仕事をしている母親だけでなく、仕事をしていない母親でも子どもを保育施設に預けられるものである。また、ソウル市でも、24時間無償で預けられる保育施設がここ数年できている。国による保育政策が急速に整備され、多くの子どもたちが乳児期から保育施設に預けられる状況となった。しかし、このことによって社会問題となってきたのが、乳幼児期の親と子どもの愛着関係を基盤とした養育の機会が相対的に奪われてしまったことである。セラプレイの理論はアタッチメント理論に基づいており、言語や自我が獲得される前の乳幼児期からの母子関係の構築にアプローチするものである。こうしたセラプレイの目標、方法が、「母性的養育の剥奪」を懸念する動向と重なり広まったとも考えられる。近年の韓国における母子関係の急激な変容に伴う社会的ニーズと、セラプレイの理念、方法が合致したことが、セラプレイの韓国での普及の要因のひとつだった。

同センターは、ソウルの<sup>カンナム</sup>江南地区に2009年に開設された施設であり、設備としては、2つのセラプレイルーム、プレイルーム、グループリーム、観察室、受付ロビー、オフィス、キッチン付き準備室、トイレがあり、段差のない板張りの床、やさしいパステル調の色のドアや壁、手作りのぬくもりある飾りや置物があり訪れる人をあたたかく迎えてくれている。これらの部屋の配置は、クライアントが来所した際に他の人と会わずに各部屋



写真1 受付ロビー (2012年著者撮影)



写真2 セラプレイルーム (2012年著者撮影)



写真3 観察室 (2012年著者撮影)



写真4 サンドラ氏(中央)、フィリス氏(左)、ユニセンター長(右)とセラプレイトレーナー、トレーニー (2012年著者撮影)

に移動できるように工夫されている。同センターはセンター長の他、セラプレイセラピスト2名、インターン4名がスタッフとして働いている(写真1)。

セラプレイルームは、床と壁の下側1m程が板張りの部屋で、入口から正面の壁に2m×2mほどの鏡がある<sup>5)</sup>。入口左側の壁の前にはマットやカラフルなクッション、大判の布などが置かれている。セラプレイルームには基本的に特別な遊具は常設されておらず、子どもに合わせた遊び道具がセッションごとに準備される。入口から左側の角には小部屋があり、マジックミラー越しにカウンセリングルームの様子を観察することができる(写真2, 3)。こうした構造の特徴には、I章で紹介したように、セラプレイの目標や方法論が反

映されている。家族の目標に応じて、セッションごとに準備室から選ばれる遊具は、特別なものや高価なものを使用するのではなく、日常生活の中で取り入れやすく、相互交流やスキンシップが図りやすいものが考慮されている。いつもの遊び道具でも子どもとの相互作用の中で何を目的としているかによって使い方が異なること、大人のリードの仕方で子どもが安心したり、興奮したり、挑戦したりできること、さらに遊具がなくとも楽しく交流やスキンシップをしながら遊ぶことなどを、親子で体験していく。

同センターでは、グループルームを使ってセラプレイセラピスト養成の講座を実施しており、臨床のための施設としてだけでなくトレーニングや、スーパービジョンの場所としても機能してい

る<sup>6)</sup>。

#### IV. 福祉機関におけるセラプレイの実践

##### ー「SOS子どもの村ソウル」ソーシャル・センターにおけるセラプレイー

韓国におけるセラプレイの実施状況に関して特筆されることのひとつに、SOS子どもの村<sup>7)</sup>においてセラプレイが導入されてきたことがある。SOS子どもの村は、戦争・災害・疾病・大事故・親の経済的な理由や不適切な養育によって家族生活を失った子どもたちに対して、「育親」と呼ばれる専門的な訓練を受けた養育者との生活を提供する代替養育機関である。SOS子どもの村は、子どもの人権保護を目的とする国際非政府開発組織のひとつであり、1949年にオーストリアで創設された後、1960年に組織の総括本部 SOS キンダードルフ・インターナショナルが設立され、1995年より国連経済社会理事会の諮問資格(カテゴリーII)を持った NGO の認定を受けている。韓国では、同村の子どもたちと育親が新たに愛着を形成しようとする際に、セラプレイが一定の役割を果たすことが期待されてきた。

1980年に韓国で2番目に設立された「SOS子どもの村ソウル」<sup>8)</sup>の場合、2012年現在、80名ほどの子どもたちが、村の15の「ファミリーの家」において、それぞれの育親のもとで生活している(写

真5, 6)。村で生活している子どもたちは、愛着の問題や虐待の問題など苛酷な家族生活の体験者が多く、養育の専門家である育親でも子どもたちの養育に難しさを感じることもある。このため SOS 子どもの村にはセラプレイの導入が行われてきた。村には「ファミリーの家」の他に、併設された SOS 地域児童センターがあり、そこで子どもと育親たちはセラプレイを受けることができる。

SOS 子どもの村のケア・モデルは、次の4つの原則から成り立っている点において、従来の施設養護や里親家庭養育と異なっている。

1. 育親：専門的な訓練を受けた特定の SOS マザー／ペアレント「育親」がひとつのファミリーとして同居し、5～7人の子どもの養育を担う
2. 兄弟姉妹：育親のもとで、異年齢異性の子どもたちが「兄弟姉妹」として共に生活する
3. 家：ファミリーはそれぞれの「家」に住み、ファミリーそれぞれの希望やニーズが満たされ「自分たちの家」と呼べるような個性が配慮される
4. 村：複数のファミリーが生活する「村」は、地域との交流を通して子どもたちが周囲の環境になじみながら生きてゆけるよう、地域に対して常に開かれている



写真5 SOS子ども村入口に描かれた壁画  
(2012年著者撮影)



写真6 SOS子ども村(2012年著者撮影)



写真7 SOS 児童福祉センター (2012年著者撮影)



写真8 受付前応接コーナー (2012年著者撮影)



写真9 心理療法室 (2012年著者撮影)



写真10 セラプレイルーム (左側壁は鏡) (2012年著者撮影)

さらに、SOS 子どもの村はその原則のひとつとして地域との相互交流を掲げ、地域の特性やニーズに応じた医療・福祉・教育施設の整備にも力を入れている<sup>9)</sup>。

SOS 子どもの村ソウルに併設された SOS 地域児童福祉センターでは、1) 児童福祉事業、2) 家族福祉事業、3) 地域社会事業、4) 相談・心理療法事業、5) 図書館の5つの事業が展開されている。これらの事業はすべて SOS 子どもの村に住む子ども及び近隣住民が自由に行き交う交流の場として機能しているばかりでなく、ソウル特別市内で何らかの困難さや機能不全に陥っている家族に対しても、子育て支援プログラムや家族の再統合支援プログラムなどを提供している (写真7, 8)。センターの相談・心理療法事業では、心

理的な問題や困難さを抱える子どもや親が、専門家による入念なアセスメントによって計画された心理療法を受けることができる。ここではセラプレイのほか、プレイセラピー、箱庭療法、アートセラピー、認知的発達を促すプログラムなどの心理療法が専門家によって行われている。

それぞれの心理療法室は1階の応接コーナー奥と2階に並んでおり、各心理療法の特色に合わせた検査用具や遊具が備えられているだけでなく、部屋ごとに異なる壁紙や床の素材によって個性的かつ親しみやすい設えとなっている (写真9)。セラプレイルームは、センター2階にあり、入口から入って左側の壁に鏡があり、鏡の前にはマットが敷いてある床張りの構造であり、遊びに使う道具は壁に備えてある棚の中に備えられ、セッション

ンをする子どもに併せて必要なものだけを取り出せるように工夫されている（写真10）。

セラプレイは、子どもたちが育親との間に新たな愛着を形成しようとする際に、重要な役割を果たしている。しかし、SOS子どもの村ソウルでは、ファミリーの家、特定の育親の存在、地域との交流に代表されるような具体的な生活環境こそが、子どもたちの安全基地の獲得と安定した愛着の再形成のための最大の装置であり、これらの機能とセラプレイをはじめとする様々な心理療法が連動することによって、より大きな効果が発揮されると考えることができる。

## V. 幼稚園・保育園におけるセラプレイの応用

### —ソウル天使幼稚園における「レインボー・プログラム」—

韓国では、幼稚園・保育園において、セラプレイの専門家によって考案された「レインボー（Rainbow）」というプログラムが実施されている<sup>10)</sup>。レインボーとは、セラプレイセラピストの監修により保育者が行うものであり、特別な支援を必要としない標準発達を遂げている子どもたちを対象に、年齢相応な情緒的・社会的体験の促進を目的に行われるセラプレイを応用したプログラムである。10年程前から導入され始め、現在約200



写真11 ソウル天使幼稚園（2005年著者撮影）

カ所の幼稚園・保育園で実施されており、実施担当保育者のための研修およびスーパービジョンの体制も整えられている（Youn, 2012）。

天使幼稚園では認知的発達や日常生活習慣の確立に加え、園児たちが育まれるべき重要な発達の要素として、1) 社会的情緒、2) 友達関係、3) 健康な方法での自己表現を挙げ、その実践として2003年にレインボーを幼稚園の活動プログラムの一つとして導入して以来、現在までにすべてのクラスにおいて毎週継続的に実施され、園児たちに親しまれてきている<sup>11)</sup>。

レインボーは、その活動の安全と質が保障されるために、次のような枠組みが明示されている。

1. レインボーは、週に1度、決められた時間に決められた場所（活動ホール）で行われる
2. レインボーは、園の年中行事やその日の状況によって妨げられたり変更されることはない
3. レインボーは、園の日常生活上の規範や枠組みとは異なるものである
4. レインボーを実施するためのルールがある；自分も他人も心も身体も傷つかず、みんなが楽しめて、大人が準備したもので遊ぶ
5. レインボーは、子どもの年齢・性別・特性に応じて異なる内容が考案される



写真12 レインボー活動の様子（2007年著者撮影）

6. レインボーの内容は、セラプレイの専門家によって綿密に監修される

7. レインボーの実施担当教諭たちは、セラプレイの専門家によるスーパービジョンおよび研修を定期的に受ける

天使幼稚園の入園時オリエンテーションの際には、レインボーを親も体験できるような形式（親子レインボー）で説明が行われる。また入園後も園だよりを通して、家庭でも親子で取り組めるセラプレイ的遊びが紹介されるなど、レインボーでの体験を家庭生活の中でも自然に展開できるような工夫されている（写真11, 12）。

I章で論じた通り、セラプレイは親子の愛着を基盤に考案された治療方法であり教育方法でもあることから、愛着関係に困難さを抱える親子に対する治療的接近や、特別な問題を持たない標準的な親子のより安定した関係の育みを支えるような発展的発達支援など、その活用は多岐にわたる。またその活用対象も、親子関係のみならず第二愛着対象としての近親者、幼稚園教諭や保育者、さらには友人、集団へと展開することも可能とされている。

## VI. セラプレイ セラピストと研究者の養成

韓国においてセラプレイが急速に普及した条件のひとつに、大学院においてセラプレイ セラピス

トと研究者の養成が行われてきたことがあった。2002年、淑明女子大学大学院児童福祉学科<sup>12)</sup>が、韓国の大学院で最初にセラプレイの養成コースを設置した。同大学院児童福祉学科は、児童青少年福祉、児童心理治療、保育と教育の3つの分野があり、セラプレイ セラピストの養成が行われているのが児童心理治療分野である（図1）。同分野では、「プレイセラピーとセラプレイを学問として学び、研究をしつつ、子どもの心理治療専門家として成長するだけでなく、プレイセラピー及び、セラプレイ理論と技法を発展させる人材を育成している」（淑明女子大学公式 HP）。同分野の院生は、「プレイセラピー」、「セラプレイ」、「心理・発達検査」のいずれかを選択しそれぞれの教授のもとで専門性を深めていくが、セラプレイの授業は必須科目のひとつに指定されおり全員がセラプレイの基礎を学んでいる。

淑明女子大学大学院でセラプレイが専門コースのひとつとして導入されるまでには、児童福祉学科の30年に及ぶ歩みがあった<sup>13)</sup>。韓国では、朝鮮戦争が休戦になった1953年の後、1970年代に児童福祉政策が整備され始めた。1971年、淑明女子大学に韓国で最初の児童福祉学科開設、その後保育者養成課程が設置され、1974年には大学の講義室の一角にセラピールームが作られた。1970年代にはじまる「セマウル運動」の政策の中、国家が国内初の保育機関である「セマウル保育園」を設立するなど、保育の問題に着手し始めた。戦災による

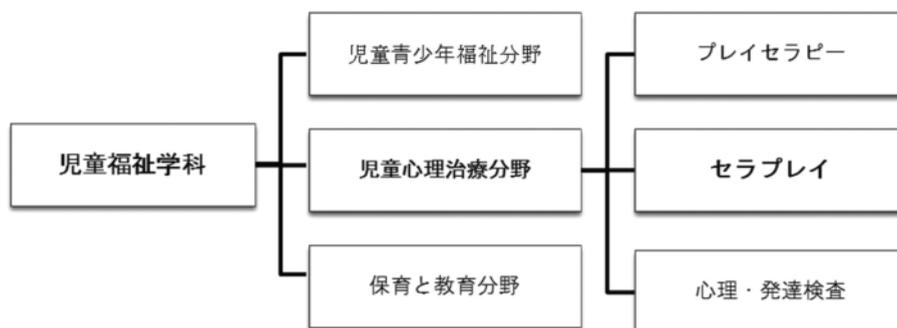


図1 児童福祉学科の分野とセラプレイ（淑明女子大学大学院カリキュラムより作成）

被害など、特別な状況におかれた子どもを保護する孤児院や乳児院は存在したものの、もともと韓国では、養育は国家が行うものではなく、家庭で行うものという伝統的な考え方が強かった。「セマウル保育園」は農繁期に子どもを預ける農村型の保育園であり、当初は託児の役割から始まった。また、都市にも、無認可の保育園が少数ではあるものの存在していた。それまで韓国の家庭では、親が仕事で忙しかったとしても、祖父母や親戚が子どもの養育を行っていたが、女性の社会進出や核家族化など時代の流れと共に、そうした家族による養育のサポートは少なくなっていた。そのような時期に「政府は反政府感情を抑えるために保育事業に乗り出していった」<sup>14)</sup>。全斗煥大統領夫人や、次の政権の盧泰愚大統領夫人が中心となって急速に政策が進められてきた。

1970年代後半は、まだ児童心理療法に対する関心は低かったが、自閉症児に対する治療方法として心理療法が有効であると考えたソウル大学の児童精神科医から、治療の難しい自閉症の子どもたちが淑明女子大学のセラピールームに紹介されるようになった。その後自閉症の子どもだけでなく、発達の問題、愛着の問題を抱える子どもも紹介されるようになった。

1980年代に入り政治・経済の自由化と共に国民の生活も変化していった。1990年代になると、子どもの心理的問題に関心が向けられるようになり、心理療法への社会的ニーズが高まってきた。それに伴い児童心理治療に関心を持つ学生が急増し、淑明女子大学大学院では児童福祉学科にプレイセラピスト養成過程を整備し、他大学でも児童心理治療を専攻できる大学が増えていった。90年代当初は、プレイセラピストを目指す学生たちは、自国内での訓練の他に米国へ行き APT (International Association for Play Therapy) で訓練を受けるものもいたが、その後1997年には、韓国プレイセラピー協会・韓国プレイセラピー学会が設立し、プレイセラピストの資格認定<sup>15)</sup>を行なって

いる。

子どもの心理療法への関心が広まるなか、淑明女子大学の研究者は、韓国において初めてセラプレイの紹介を行ない、2002年に大学院にセラプレイ専攻を設置した。同年、NGO 法人韓国セラプレイ教育センターが設立されるなど、臨床やトレーニングのための施設も整備されるようになった。2004年、韓国で最初のセラプレイセラピストが誕生してから、現在まで36名のセラプレイセラピストを韓国の諸大学が輩出している。米国をはじめ韓国以外では、プレイセラピーの療法のひとつとしてセラプレイがあるが、韓国では、子どもの心理療法はプレイセラピーとセラプレイという2つの流れができていく。プレイセラピーの方が認知度は高いが、現在の韓国の抱える乳幼児期の養育問題へのアプローチとして、セラプレイの果たす役割は大きいと期待されている。

## 結びにかえて

日本における子どもを対象とした心理療法において、子どもと親とセラピストの相互関係を今後どのように構築していったらよいか。本稿を通じて見えてきた課題はふたつある。

ひとつは、日本における子どもを対象とした心理療法の理論と実践の歩みを、日本社会における親子の愛着関係の変容という視点から、改めて整理することである。今回、韓国におけるセラプレイの概況を明らかにする中で、セラプレイの導入と普及の背景のひとつとして、韓国における親子の愛着関係の急激な変容が浮き彫りになった。セラプレイ研究者や実践家たちは、セラプレイを韓国において普及する際に、セラプレイの受容を促した社会的背景についても認識し、その危機的な状況について警鐘を鳴らす姿勢も示していた。

ふたつは、米国や韓国におけるセラプレイの概況をふまえて、日本におけるセラプレイの研究と実践の動向を整理することである。日本では、著

者の1人であり TTI 認定セラピスト兼、トレーナーの高井が、セラプレイ カウンセリングセンター東京を設立し、親子の関係性の問題に悩む子どもへのセラプレイ、発達障害の子どもへのセラプレイ、診断名がつきにくい育児困難例へのセラプレイ、SOS 子どもの村福岡での育親研修、幼稚園での集団セラプレイや、幼稚園教諭に対する研修などを行ってきている。また2010年より、TTI 公式トレーニングを修了した臨床心理士や医師らによって、医療機関、児童相談所、教育相談センター、保健センター、子育て支援の現場などでもセラプレイの基本理念に基づいた関わりがトレーナーの指導のもと試みられてきている。日本における実践のひろがりや具体的な治療効果について、今後明らかにしていきたい。

本稿に残された課題は多いが、行論を通じて、韓国における近年の心理療法の歩みが、日本における子どもを対象とした心理療法のあり方に多くの示唆を与えることについては明らかにすることができた。子どもたちにとって「安心できる愛着関係」をどうしたら守っていけるのか。韓国の動向も視野に収めながら、今後も、困難を抱えている子どもと親への支援に役立つ心理療法のあり方を考察していきたい。

## 注

- 1) Theraplay®は、1976年に The Theraplay® Institute: TTI (セラプレイ国際本部 1840 Oak Ave., Suite 320 Evanston, IL 60201) によりサービス・マークとして登録されている。現在、セラプレイ セラピストの資格を取得するためには、TTI の定めたトレーニングを経て協会が認定している。Theraplay の訳語については、既にジェンバーグによるセラプレイ第1版が1987年に翻訳され「セラプレイ：感覚運動遊びによる治療」と題し出版されていることから、以下、Theraplay=「セラプレイ」とする。
- 2) 韓国のセラプレイの実施機関への訪問、セラプレイ セラピスト、教育者、研究者へのインタビューを実施した。また、韓国でセラプレイを学んだ高井により、韓国のセラプレイの実際について詳細な情報を補うこともできた。
- 3) フィンランドでは短期宿泊型家族セラプレイも行われており、一軒の家が宿泊セラピー用に使用されている。  
<http://www.sos-lapsikyly.fi/lastensuojelu/Pages/theraplay-hoidon-tukena.aspx>
- 4) 「ユン セラプレイ カウンセリングセンター」所長であるユン・ミウォン (尹美遠) 氏は、韓国で最初のセラプレイ セラピストであり、現在の韓国セラプレイ協会会長でもある。
- 5) セラプレイでは、鏡は子どもと一緒に遊ぶ道具であり、子ども自身の内面を映し出し、相手と疎通するための媒体になることもある。子どもがセラピストとの間で安心し、遊びを通してありのままの自分が受け入れられている様子を鏡で実際に見ることにより、子どもがその肯定的な関係性に改めて気づくための解説者の役割を鏡が担うこともある (Shin, Youn, 2011)。
- 6) 著者らがセンターを訪問した日は、セラプレイセラピスト養成の講座を実施しており、米国からセラプレイ協会の評議員でクニリカルディレクターでもあるフィリス・ブース (Phyllis B.Booth) 氏と、トレーナーアドバイザーのサンドラ・リンダマン (Sandra Lindaman) 氏が講師として招かれ、10数名の訓練生が集まりトレーニングを受けていた (写真4)。
- 7) SOS 子どもの村 (ドイツ語で SOS キンダーdorf) は、子どもの人権保護を目的とする国際非政府開発組織のひとつである。1949年にオーストリアのチロル地方イムスト村に、ヘルマン・グマイナー氏により創設された。その後、1960年に組織の総括本部である SOS キンダーdorf・インターナショナルが設立され、1995年より国連経済社会理事会の諮問資格 (カテゴリーII) を持った NGO の認定を受けている。戦争・災害・疾病・大事故・経済的理由などにより家庭生活を失った子どもたちに対して、「家族」を基盤とした代替養育を提供することをミッションとしており、2012年現在、世界125ヶ国に518の SOS 子どもの村が設立され、78,000人以上の子どもたちが SOS 子どもの村ファミリーとして生活している (SOS Children's Village URL)。日本では、現在40,000人以上の子どもたちが代替養育を必要としており、その理由の多くが経済的破綻、養育者の精神疾患、虐待など、親の機能不全によるものである (「社会的養護の現状について (平成24年度9月版)」厚生労働省 URL)。発達早期

からの養育者不在 (maternal deprivation) あるいは不適切な養育 (maltreatment) を体験した子どもたちの精神的健康、知的情緒の発達や社会適応については、特に愛着形成不全を軸にした多くの研究により深刻な問題が指摘されていることから、現代の代替養育においては、子どもと安定した愛着関係を育むことのできる特定の代替養育者の存在と、こうした愛着関係の構築が可能となるような生活環境の整備はもちろんのこと、特に虐待の経験や深刻な喪失経験のある子どもたちに対する専門的な心理的支援は必要不可欠といえる。

8) 韓国ソウルにある SOS 子どもの村ソウル、および併設の児童福祉センターを視察し、子どもの村の村長、心理療法部門の専門職員、セラプレイセラピストに SOS 児童福祉センターでの心理療法についてインタビューを行った。同村には、2010年9月に SOS 子どもの村福岡の育親を含む職員たちが視察に訪れており、村の育親たちへのインタビューが報告書にまとめられているので参照されたい (SOS 子どもの村福岡 URL)。

9) 2012年現在、世界各国に75の医療センター、575の福祉センターが設立されている他、各地域のニーズに応じた就学前通所施設や学校、図書館などの設立にも貢献している (SOS Children's Village International URL)。

10) セラプレイセラピストが実施する治療的な集団セラプレイと区別するため、韓国では幼稚園・保育園での集団セラプレイの応用はレインボーというプログラム名で実施されている。

11) ソウル天使幼稚園の園長、主任、教諭、そして同園から別の保育園に転職後も引き続きセラプレイ的な関わりを実践されている主任の4名にインタビューを実施した。天使幼稚園は1985年に創立された私立幼稚園で、2000年より現在の雙門洞に移転された。1クラス20~25名で、3歳児1クラス、4歳児・5歳児2クラスずつの編成となっており、これまでの卒園生は2000人を超える。

12) 淑明女子大学はソウル市街地にある総合大学であり、児童福祉学科は1971年 (大学院修士・博士課程は1978年) に開設された、韓国最初の児童福祉学科である。現在の児童福祉学科には、学部273名、修士課程184名、博士課程142名の学生が在籍している (淑明女子大学公式 HP)。

13) 淑明女子大学名誉教授であり、韓国セラプレイ協会アドバイザーでもあるキム・グァンウン (金光雄) 教授のインタビューによる。

14) 同上

15) 現在、韓国でプレイセラピストの資格を取得するには、大学院修士課程を修了していることが条件である。その後、資格に必要なインターン、SV、試験を得て資格取得となる。APTの資格に必要な約60~70%の科目を国内で習得することができるようになっている。

## 参考文献

Booth, P.B. & Jernberg, A.M. (2010). *Theraplay: Helping Parents and Children Build Relationships Through Attachment-Based Play* (3rd ed.), San Francisco: Jossey-Bass.

Booth, P.B. & Lindaman, S. (2000). Theraplay for Enhancing Attachment in Adopted Children. In Kaduson, H.G. & Scheafer, C.E. (Ed.). *Short-Term Play Therapy for Children*. The Guilford Press. (P・B・ブース&S・リンダマン「8章 養子の子ども一愛着を強くするセラプレイ」、H・G・カドゥソン&C・E・シェーファー編著、倉光修監訳、『短期遊戯療法の実際』創元社、2004年、pp.237-279)

Bowlby, J. (1988). *A Secure Base: Parent-Child Attachment and Healthy Human Development*. Basic Books. 古市久子、榊形公也、鄭廣姫、張命琳、韓在熙 (2002). 「就学前教育における教育過程の日韩比較研究」大阪教育大学紀要、第IV部門、50(2)、pp.253-267

Jernberg, A.M. (1979). *Theraplay: A New Treatment Using Structured Play for Problem Children & Their Families*. San Francisco: Jossey-Bass. (A・M・ジェーンバーグ著、海塚敏郎監訳『セラプレイ：感覚運動遊びによる治療』ミネルヴァ書房、1987年、ただし初版本の翻訳)

金 光雄 Kim, K. (2012). Letter to Theraplay Family Members. *Fifty Years of Theraplay and Asian Perspective with Phyllis B. Booth*. pp.1-8.

厚生労働省 (2012). 「社会的養護の現状について (平成24年度9月版)」URL:[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki\\_yougo/dl/yougo.genjou.01.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo.genjou.01.pdf)

Lindaman, S. (1999). Theraplay for children who are adopted or in foster care. In Jernberg, A.M. & Booth, P.B. (Ed.), *Theraplay: Helping Parents and Children Build Better Relationships Through Attachment-Based Play* (2nd ed.). San Francisco: Jossey-Bass. pp. 291-333.

- Makela, J. & Vierikko, I. (2005). From heart to heart: Interactive therapy for children in care. Report on the Theraplay project in SOS Children's Villages in Finland 2001-2004. The SOS Children's Villages Association, Finland.
- Morgan, C.E. (1989). *Theraplay: An evaluation of the effect of short-term structured play on self-confidence, self-esteem, trust, and self-control*. Unpublished research, The York Centre for Children, Youth and Families, Richmond Hill, Ontario, Canada.
- Munns, E.(Ed.) (2000). *Theraplay: Innovations in Attachment-Enhancing Play Therapy*. Northvale, NJ: Jason Aronson Inc.
- Munns, E. (2003). Theraplay: Attachment-Enhancing Play Therapy. In Scheafer, C.E.(Ed.). *Foundation of Play Therapy*. (E・ムンス著「7章 セラプレイ」、C・E・シェーファー編著、串崎真志監訳、『プレイセラピー14の基本アプローチ』創元社、2011年、pp.142-157)
- Munns, E. (Ed.) (2009). *Applications of Family and Group Theraplay*. Jason Aronson Inc.
- Ritterfeld, U. (1990). Putting Theraplay to the test: Evaluation of therapeutic outcome with language delayed preschool children. *Theraplay Journal*, 2, pp. 22-25.
- Salo, S. & Lampi, L. & Lindaman, S. (2010). Use of the emotional availability scales to evaluate attachment-based intervention-Theraplay-in substance abusing mother-infant dyads in Finland. *Infant mental health Journal Supplement 2010* : 32 : 77.
- 申賢貞・尹美遠 Shin, H. & Youn, M. (2011). The meaning of Theraplay's mirror. *Korean Society for the Study of Anthropology of Education Journal*, 14(3), pp.103-135.
- Siu, A.F.Y. (2009). Theraplay in the Chinese world: An intervention program for Hong Kong children with internalizing problems. *International Journal of Play Therapy*, 18(1), pp.1-12.
- 淑明女子大学公式 HP : <http://www.sookmyung.co.kr>  
SOS Children's Village International URL : <http://www.sos-childrensvillages.org>  
SOS Children's Village Japan URL : <http://www.soschildrensvillages.jp/Pages/default.aspx>  
SOS 子どもの村福岡 URL : <http://soscvj.org>
- Stren, D.N. (1995). The motherhood constellation: Aunified view of parent-infant psychotherapy. New York: Basic Books. (D・N・スターン著、馬場禮子・青木紀久代訳、『親—乳幼児心理療法』岩波学術出版社、2000年)
- Wettig, H.G. & Coleman, A.R. & Geider, F.J. (2011). Evaluating the effectiveness of Theraplay in treating shy, socially withdrawn children. *International Journal of Play Therapy*, 20(1), pp.26-37.
- 尹美遠 Youn, M. (2012). A Preliminary Study on the Developed Application of Sunshine Program. *Korean Journal of Theraplay*. 2(1). pp.1-14.

〔 2012年12月3日 受付 〕  
〔 2013年1月16日 受理 〕